

次ページへ続く

Continued on next page...

國學院  
高等學校  
藤田小林文庫藏風流踊歌本解題稿

藤田小林文庫は、故藤田徳太郎氏と小林武治氏が、日本歌謡史研究を目的として蒐集された、千余点にのぼる歌謡資料であり、國學院高等學校に寄贈され、現在同校に所蔵されている。既に、昭和三十八年の日本歌謡学会創立大会において、その一部が展示され、同四十一年には目録『國學院高等學校紀要』・收藏和書目録と社会科学図録も公にされて、学会に広く紹介された。また、日本歌謡学会創立大会で展示された資料のうち、風流踊歌関係二十八点が、白田甚五郎・徳江元正・須藤豊彦の三氏により、『日本歌謡研究』第一号・第九号に翻刻され、解題が付されている。

本稿においても、風流踊歌本二十六点を採り上げて、解題を試みた。そのほとんどが、『日本歌謡研究』に翻刻・解題されたものと重複するが、ここでは、先学の言及することの少なかった、風流踊歌本の伝承地解明を主な目的とした。

体裁等不備な点も多いと思われるが、後日補綴する機会をもちたいと思う。調査に御協力くださった、國學院高等學校長小林武治氏・同庶務主任尾高敬三氏・同図書館教職員の方々に厚く御礼申し上げる。

(第四室 真鍋昌弘)

(1) 神踊本 一冊 整理番号 1-5

慶応三年書写。二四・五×一七・〇。二五丁。表紙後装。外題「神踊本」。第二五丁裏に所有者とおぼしく「甲田儀右衛門 西之介」とある。

本書は、和泉・熊取町に伝承していた雨乞踊歌と比較対照させるべきものである。本書が、

道うた 雨山踊 伊勢宮踊 ひん田踊 五色踊 寅松踊 十七踊 車  
おとり 津嶋おどり しうとめ踊 なんと 新かまくら 御寺 天じ  
く

の構成になっているが、『熊取郷土調査』(昭和九年六月刊。ガリ版刷。大阪府泉南郡熊取尋常高等小学校編)所載、雨乞踊歌にも、次のように、ほぼ同様の踊歌が見える。

宝踊り 伊勢宮踊り 五色踊り 対島踊り ひん田踊り 鳴門踊り  
具足踊り 新鎌倉踊り 天笠踊り 御寺踊り 姑女踊り 十七踊り  
本書の「雨山踊」(上段)と「熊取郷土調査」の「宝踊り」(下段)の二

部分を示すと、

・ひよ あめ山さまのくにおしと  
のりうをのこまをよく ヨヨ  
・雨山龍王のこまよく 乞へば  
降らしやるらや見事くく

こゑばふらしやるやらみごと／  
とやあらみごと やらたから  
をどりハしやらみごと／ じ  
よん／ じよんしよん  
さてこて／ さ／ さ／ さてこて  
／ ヨいそりや はらはんにや  
はん

・ひヨ雨山さまのしやだんのたく  
み／ しほハやつむねをしろ  
ハを／ ぎたにおうけてかげずく  
り／ 〇

のようになって、内容は同一のものであることがわかる。

本書「寅松踊」は、

ヨ是のしそんの寅松様は／ 明て十三まだ十五にはならねども こ  
ぐちを一字とヲたしなむ／

ではじまり、以下「馬をハ何とこのまれて」「倉おバ何とこのまれて」「具  
足を何とこのまれて」「兜（かぶと）とを何とこのまれて」「弓をハ何とこのまれて」  
「矢つばを何とこのまれて」「槍をば何とこのまれて」と続けるが、「熊取  
郷土調査」報告「具足踊り」では、右引用冒頭の歌詞はないが、やはり  
「馬」「鞍」「具足」「甲」「弓」「やり」を、ほぼ同一の歌詞で変める。

本書「道うた」は、

これほどのをてらかよいにしよあるしやくはちひろをて／ 〇と

やあら宝踊りはやら見事／  
拍子ジヨン／ シヨ／ シ  
ヨン／ サテコテ／ サ、  
、サテコテサ、、サテシ  
ンハラ／ ハンニヤハン

・雨山さまのしやたんのたくみ／  
四方ハツ棟後は大木谷を受  
けてかけつくる／ やら見事  
やら宝踊りはやら見事／

りあげてふいてみたればしよあるふしやよつでた／ 〇 まずよい  
にとのごとまつふし まちゑてのごとねるふし／ 〇 あかつきのは  
なれふしとや よあけてあだなのたつふし／ 〇 下踊

を用いている。これは、「熊取郷土調査」には見えないけれども、和泉地  
方で、同種の歌を「道歌」として用いている場合は多く、例えば、「神踊  
歌」（天保二年。岸和田）。「踊おんど本」（明治二年。岸和田）。「当社祭礼  
小踊」（文政十三年。岸和田）。「神社小踊歌」（文政六年。泉北地方）など  
を確認できる（『和泉史料叢書・雨乞編』、大越勝秋編『泉北地方の民謡  
集（一）など参照』）。この尺八を拾う歌を道歌として使用するのは、兵庫・  
百石踊系統、阿波・神踊系統などに及ぶが、なかでも、和泉地方におい  
て最も顕著であるとしてよい。おそらく採集漏れであろう。

また「新かまくら」があったことも、前掲「熊取郷土調査」によつて  
確認でき、例えば最後の行で、本書は、

ヨヲなにをなげきあるかわやなぎ水ではなをなげきそろ／  
とうたうところを、

何をなげくぞ川柳水の出はなをなげき候／ 〇 忍ぶ恋とて面白や／  
としているように、「忍ぶ恋とて面白や」を各連の終りに加えている程度  
の相違のみである。

「車踊」は、「熊取郷土調査」に記されていないが、これも、同地に伝  
承しなかったと見るのは疑わしく、例えば前引「神踊歌」（天保二年）な  
ども、同歌が「車間踊」として見えている。

なお、「熊取町の民謡集」（大越勝秋篇）所載「大久保雨乞踊」にも「宝

踊「伊勢宮踊」「五色踊」があり、本書と同じである。またその「宝踊」は「雨山踊」である。

以上取り上げた踊歌以外のすべては、『熊取郷土調査』採集踊歌と同一である。

これらの理由により、本書を、和泉・熊取町における歌本と判定する。

## (2) 神踊寄音頭手控 一冊 整理番号 1-6

明治初期書写。仮綴本。一二・〇×一六・〇。四四丁。扉題「神踊歌音頭手控」。題の左下に所有者とおぼしく「小門柳右衛門」。

本書は、次の踊歌から成る。

道歌 十七道歌 あまが道歌 世の中踊 伊勢宮踊 御宮踊 宝踊  
御寺踊 花見踊 吉野踊 さつまをどり ふなかつた踊 松虫踊 寅松  
踊 しのび踊 御若衆踊 鳴子踊 雨乞踊 順礼踊 桜踊 御山踊  
浦方踊 綾はた踊 若松踊 鮎みせ踊 鞍馬踊 とくさ踊 しよくみ  
踊 山家踊

以上の踊歌の内、注意すべきことをいくつか記す。

桜踊。ほぼ同形は、和泉・岸和田安政三年本「拍子踊り歌」(『和泉史料叢書・雨乞篇』所収)・桜踊に見える。両書合わせて、そこにうたわれる桜名所は、「吉野御山」「熊の御山」「あわじお山」「ならの御山」「高野山」「吉野山」「愛宕山」「住吉明神」とあって、畿内のものである。

御若衆踊。『葛城踊音頭拍子』(前掲書所収)や前掲安政三年本などに見える「若衆踊」と同じ。本書で「御若衆さまのおはだにめせたるかたひ

らハ、とこやそめてのし」とあるところは、右二書では「とこや染で候」とあるから、本書の「のし」の表現は特色がある。そのあたりから、『日本歌謡研究』誌解説では、紀州有田地方の踊歌本とするが、そのみで伝承地を決めることもできないであろう。

松虫踊。この名称の踊歌は、播磨・百石踊、阿波・神踊などに散見するが、歌詞の内容は別系統である。大和・山辺郡・都祁村吐山・太鼓踊のものはほぼ同系と言えるが、そこにうたわれている山の名は、奈良地方独自のものになっている。本書では、「だいせんじ御山」「すみよし御山」「天野御山」「かんこのしめを(い)」に巢をかけて鳴く。和泉・貝塚市「神おどりうた手はん」では、「天王寺御山」「堺お山」「大鳥お山」「信田御山」とあり、本書で「住吉御山」「天野御山」とあるところは、その和泉地方の地名を並べる発想に近い。紀州には、この系統歌は見うけられない。

御山踊。お山として「かづらき山」「牛たき山」「金剛山」など、和泉の修験名山をうたい込むのが特色。和泉地方「葛城踊」「御山踊」などに合わせ見るべきものである。

道歌・伊勢宮踊。前掲(1)神踊本の「道うた」「伊勢宮踊」と同じ内容である。

十七道歌。道歌の歌詞と一つにすると、例えば、和泉・文政十三年本「当社祭礼小踊」・道行次第と同じものとなる。

順礼踊。同歌は、右掲「当社祭礼小踊」に見える。

とくさ踊。「吉野山」「熊野山」「淡路御山」「愛宕山」がうたわれる。

さつまをどり。阿波・神踊に同題歌はあるが、内容は異なる。

以上、和泉地方の地名がより印象的であり、同地方の踊歌本に見える踊歌との重なりが多いことなどから、現段階では一応、和泉地方雨乞風流踊歌本と見ておくのが最も妥当のように思える。

(3) 四社神踊本 一冊 整理番号 117

明治三五年書写。二四・七×一七・〇。二八丁。外題「四社神踊本」。表紙外題の右肩に「明治三十五年」とあり、第二八丁裏に「明治卅八年七月十四日 名東郡一宮村 広川増太郎」とある。

阿波・名東郡・一宮村の神踊歌本。後掲(9)「神踊歌全」と同種の歌本。四社、つまり東宮・西宮・與利大明神・舟戸大明神と、それぞれ四社の前の踊歌に分けられている。

東宮——大黒踊 綾竹踊 雪花踊

西宮——御所之踊 五色踊 塩汲踊 者美しや踊 名古屋踊 博多踊

毬の踊 松むし踊 鎌倉踊

與利大明神——志渡の踊 津羽黒踊 住吉踊

舟戸大明神——忍び踊 しんく踊

阿波国内における同類型を簡略に示すと、

大黒踊。名西郡石井町城ノ内・曾我氏神社神踊・「大黒」が比較的近い。

名東郡・国府・南岩延村・神踊歌・大黒踊、那賀郡・「大黒踊」(以上、「郷土研究」五巻五号、「日本歌謡集成」巻十二、本田安次著「語り物・風流二」に翻刻)などは、一部分同類歌詞を含む。同じ「大黒踊」の名称は、播磨・穴栗郡・チャンチャコ踊にも見える。

綾竹踊。前掲曾我氏神社神踊・「綾踊」に、後半の「綾竹をはたと忘れて」以下が見える。前半は、阿波・和泉地方の入端や道歌として見える歌詞である(前掲、(1)「神踊本」、(2)「神踊奇音頭手控」など参照)。

雪花踊。四連から成るのでそれを引用する。

向ひ路の山にふる柴雪が さらばんく 笹の雨のおふもさよ 雪花踊ハ一おとり 岩榎山にふる柴雪が さらばんく 笹の雨のおふもさよ 雪花おどりハ一おとり 伊野土山に降る柴雪は さらはんく 笹の雨のおふもさよ 雪花踊ハ一おとり こんじの山に降る雪ハさらはんく 笹の雨のおふもさよ 雪花踊ハ一おとり ヒヤシャンくヒヤシャンく

これは、前掲曾我氏神社神踊・「雪花踊」、同国・三好郡・西祖谷村・神代踊・「雪はらひ」などによって、本書の「笹の雨のおふもさよ」の「笹の雨」は「笠の雪」の変化又は誤字のようにも見うけられ、「柴雪」も「白雪」の訛りの可能性が大きい。なお、この「笹の雨の重さよ」の句は、恋風が来ては袂に掻い縫れてなう 袖の重さよ 恋風はおもひ物哉(「閑吟集」・72。同類型は狂言小歌にも利用されている)

などの中世小歌に見える「……の重さよ」の句を受けているものと見てよからう。

博多踊。同種は、名東郡・上八萬村・神踊歌・「博多踊」など。

しんくの踊。名東郡・国府村・早洵・神踊・「新工踊」、同村・南岩延村・「新工踊」があつて歌詞にそれぞれいくらかの相違がある。

以上、歌詞の上からも、阿波・神踊歌本であることを認めることがで

きる。

(4) 御宮踊本 一冊 整理番号 111

昭和二年刊。二五・〇×一七・八。五三丁。外題「御宮踊本」。刊記「昭和貳年八月 矢野村青年会 馬場支部員」。

昭和二年に、木版刷の体裁で出された。踊歌は、次の順に記されている。矢野村は、前掲(3)の、阿波・名東郡・一宮村に近い矢野村であろう。

神楽踊 田村踊 国誉踊 忠誠踊 奉曳踊 御蔭踊 名所踊 明治踊 熊谷踊

(5) 神踊 一冊 整理番号 115

明治初期書写。一八・五×二五・八。仮綴本。10丁。扉題「神踊」。題左下に「小澤」とある。

「神踊」と「花踊」を記載。それぞれ、二つの「道行」と一つの「引端」から成る。畿内を中心としての、標準的な雨乞風流踊歌の構成・内容と比較して、ややその雰囲気異にする。例えば「花踊」の、

春は桜の木の本にく 四方の山く霞たつ はらくほらくはら  
といつる 誰か情か村雨

の部分は、女歌舞伎踊歌集・天理図書館本「おとり」の、  
おほろ月夜の山の端にく なこりおしやつれなやうく はらくお  
ろと、いつれたかなさけそむら雨(ややこ)

をはじめとする、例えば、次のような、いわゆる「ややこ踊」系統の結

びの文句を伝えている。

ひやしはく舟かよサ 君待つたんびや揖をしずめてお待あれンサ はら  
らくはひや ほろくはらはといづるんたがなさけぞ むうらさめひ  
ひや ひいふりよにひやふりよひやをんは(因幡・越路・雨乞風流踊・  
屋々こをどり。『民俗芸能』・32号 山路興造氏翻刻)

いよ登り下りがしぎやなれば みあげうれしや たびくんいよそ  
らくふるくはらくといづるたがなさけの村さめ(摂津・八部郡・  
車・雨乞拍子踊・やゝ子踊。『芸能史研究』・51号 名生昭雄氏翻刻)  
「神踊」の名称は、阿波・和泉その他の地域に見え、「花踊」なる名称も、  
阿波・淡路などに見えるが、本書の伝承地は不明である。

(6) 神楽踊太鼓 一冊 整理番号 118

安政五年書写。二八・八×二〇・六。一六丁。外題・内題ともに「神楽  
踊太鼓」。表紙の外題右肩に「安政五戊午年」、左肩に「六月吉日」。裏表紙  
に「<sup>(ヤツレ)</sup>□□持用「五冊本之内ヨリ写之」とある。

次に、丹後由良地方風流踊歌本三種とその所収踊歌を比較してみる。

A、「神歌并太鼓」(文化九年書写。由良庄)。B、「祭礼踊り歌控」(寛政年間  
書写。由良)。C、「笹囃子躍歌」(弘化三年書写本からの大正四年転写本。  
由良脇)。A・忍頂寺文庫蔵、B及びCは京都教育委員会篇「丹後の笹ば  
やし調査報告書」の翻刻による。各踊歌は本書の配列の順に並べかえ、  
それぞれのもとの順序は、①②で示した。

本書

	A	B	C
神楽踊	①神楽踊太鼓	①神楽踊	①神楽踊
笠之踊	②笠の踊	②笠之踊	②笠の踊
篠原踊	⑩篠原踊	⑩篠原おとり	③篠原踊
矢倉踊	③矢倉踊	③やぐらおとり	④矢倉踊
葵踊太鼓	④葵踊	④青井踊り	⑤葵ひ踊り
拾九踊	⑤十九踊	⑤十九踊	⑥十九踊り
帷子踊	⑧帷子踊	⑧かたひらおとり	⑦帷子踊り
奥州踊	⑥奥州踊	⑥奥州踊	⑧奥州踊り
親方踊	⑦親方踊	⑦親方踊	⑨親方踊り
芳野踊	⑨芳野踊	⑨吉野おどり	⑩吉野踊り
此家踊	⑪さいか踊	⑪お寺おどり	⑪斎家踊り
御寺踊	⑬御寺踊	⑬かねいおとり	⑬御寺踊り
鐘鐺踊	⑭鐘鐺踊	⑭駒引おとり	⑭鐘鐺踊り
駒曳踊	⑮駒引踊	⑮駒引おとり	⑭駒引踊り
船頭踊	⑯船頭踊	⑯船頭おとり	⑮船頭踊り
(以下、太鼓口調子を載せる)	(以下、踊あけの歌を五種載せる)	(以下、おどり場五ツ、の歌詞及び太鼓口調子を載せる)	

A・Bでは、踊歌記載の順に変化はあるが、Cは、完全に本書と一致する。

本書裏表紙に、「五冊本之内ヨリ写之」とあるが、それと関連ある記事

を、三本に以下の如く認めることができる。

A 左之通五ヶ村立合ニヨリ相改有之仍如件

庄屋 源左衛門

同 善四郎

年寄 清助

同 九郎左衛門

同 興助

同 三郎兵衛 (扉裏)

B 寛政年中五ヶ村立開ノ中本之写 祭礼踊り歌控 丹後国加佐郡由良

村 大森又兵衛 (以上表紙)

浜野改役人 庄屋源衛門 同藤三郎 右者此役□代ニ而改五ヶ村相

定 (以上裏表紙)

C 寛政式巳卯年、五ヶ村役人中并ニ惣代之者立会ニテ、五冊お相認め

有之所、紛失の村も御座候ニ付、天保十四癸卯年、於如意精舎、五

ヶ村再会致し書面之通り相改申候。依之五冊物相認め村々え老冊宛

相渡し置候事。向後撰ニ不致緩く事。前書之通り今般改草いたし候

処、相違之無ニ付致奥印候。以上。

庄屋 孫兵衛 印

々 長左衛門 々

年寄 長兵衛 々

々 吉左衛門 々

々 源兵衛 々  
々 半左衛門 々

右は五ヶ村蔵書の通り少も相違無之謹写致候也 佐原書

ゆえに、本書で言う五冊本というのは、由良五箇村にそれぞれ一冊ずつ伝承していた校訂踊歌本であることがわかる。

AとBに見える「踊あけ」の歌五種、「おどり場五ツ」というのは、次の五種の歌を指す（紙幅の都合で、Bの方をもって代表とする）。本書とCは、それらの歌詞が、それぞれの踊歌の最終部分にはいつている。

#### 踊 あけ

千りかやぶに鳴ひよ鳥ハくあさ草刈のめをさます

とふじがたうと思ひしかく心にかけ添群雀く

年々の篠の竹しげればほそくおれらも殿とねてほそく

かぶき山陰すをかけてく国々の鷹がすをくむ

お庭になごりハおしけれど明年参ろ又参く

なお、本書の矢倉踊、芳野踊、此家踊、鐘鐺踊、駒引踊、船頭踊に「ユリ」とあるが、これは、B・Cにも認められる。唱謡法・演奏法としての「ユリ」の歴史に関係する実例として注意される。

本書は、丹後・由良地方・太鼓踊歌本である。

#### (7) 神踊歌本 一冊 整理番号 1121

江戸末期書写。二四・五×一六・〇。五八丁。外題「神踊歌本」。

所収踊歌を次に示す。

柳井津踊 宝の踊 みころの踊 白金踊 美濃踊 申子踊 帷子踊  
綾機踊 虎松踊 住吉踊 平野踊 相模踊 宇わな利踊 鞠踊 お山  
踊 小草踊 源太郎踊 鼓踊 船子踊 扇虎松踊 伊勢島踊 しなだ  
ん踊 白金弥十郎踊 恋の踊 手拭踊 しのび踊 燕踊 殿御踊 お  
たか踊 若殿踊 鎌倉踊 女郎屋踊 清月踊 高立引踊 官引踊 寺  
の入端 お若衆踊 忍び踊

いま、阿波・那賀郡・和食及び桑野地方の踊歌（浅野建二著『日本歌謡の発生と展開』、檢瑛司編『鳴門・ふるさとの芸能』所収）と対照させてみると、ほぼ全部において一致する。

「しなだん踊」は、和食では「した段踊」、「白金弥十郎踊」は、和食では「白金踊」、「高立引踊」は、和食で「坂東踊」、桑野では「坂東引踊」又は「高立引踊」と称す。「寺の入端」は、和食では「寺引踊」とも言われる。「鼓踊」は、例えば(3)「四社神踊本」の「しんくの踊」に見えるように、「しんく」を冒頭に出す型である。「平野踊」の内容は「飛驒踊」であるから、「平野」は「飛驒」の訛りと見てよからう。

本書は、阿波・那賀郡・和食又は桑野地方の雨乞風流踊歌本と見てよい。

#### (8) 御神踊 一冊 整理番号 1134

明治三十年書写。二五・〇×一七・〇。仮綴本。27丁。扉題「御神踊」。扉題の右肩に「明治卅年酉ノ七月廿八日改」、左方に「菖蒲邑 久賀芳吉」とある。



はじめ三丁分ほどに書き付けられた歌は、何々踊と呼ばれるような標準的体裁を整えた踊歌ではなく、即興的な俗謡の断片である。それに続いて、

屋敷踊 宝踊 あやはた踊 お舟踊 大神踊 たかす踊 くるま踊  
笠伎 白兼踊 をやかた踊 金すき踊 喜惣踊 虎松踊 やくし踊  
つばくら踊 順れい踊 ヲかじ踊 ばはん踊 五色の踊 御参宮踊  
よんぼし踊 長者踊 年仏踊 年仏踊

阿波・那賀郡・上那賀町・菖蒲村の雨乞風流踊歌と一致するものが多い。例えば、

よんぼし踊。阿波では、「えぼし踊」「えぼし」などと呼ぶところが多いが、菖蒲・拝宮の二地域では「よんぼし踊」「余帽子踊」などと呼ばれている。

やくし踊。阿波では、各地に「申し子踊」があるが、菖蒲他三箇所では、同じ内容を「薬師踊」と名づけている。

ばはん踊。検璞司編『鳴門・ふるさとの芸能』などによると、阿波では一般に「吉田踊」「月待踊」などの名称で知られているようであるが、菖蒲では「ばはん踊」と言う（なお、まったく別系のものであるが、河内・津田・文政元年八月書写『三の宮屋形踊』所載の波半踊は「船は一番宝積し候 波半船かの面白く」ではじまるもので、おそらく「八幡船」に関係するめずらしい踊歌として、注意しておいてよいと思うので付言しておく）。

以上の他「喜惣踊」「五色踊」「つばくら踊」「ヲかじ踊」などが、菖蒲のも

のと一致する。なお、和泉地方雨乞風流踊歌との類似もある程度認められる。

本書の「菖蒲邑」は、阿波・那賀郡・菖蒲村のことである。

(9) 神踊歌全 一冊 整理番号 11-64

文久元年書写。二四・五×一六・五。三〇丁。外題「神踊歌全」。奥書に「文久元酉年八月吉日 一宮村中分板東氏」とある。

本書は、次のように四つの神社の踊歌として分けて載せている。

東宮 大黒踊三ツ拍子 あや竹踊 雪花踊

西宮 御所の踊拾六拍子 五色の踊 塩くみ踊 しやみしや踊 名古

屋踊 はかた踊 まりの踊 松虫踊 鎌倉踊

興利大明神 志度踊八ツ拍子 つわくろ踊三ツ拍子 住吉踊

船戸 しのみ踊八ツ拍子 しんくの踊 鎌倉踊

ほぼ前掲(3)四社神踊本と同じ組織・内容をもっている。阿波・名東郡・一宮村・板東氏所持の雨乞踊歌本である。

(10) 雨乞風流踊歌本 一冊 整理番号 11-66

嘉永五年書写。一二・五×一七・五。五一丁。横本。表紙はあるが、外題・内題ともになし。右標題は仮題。五二丁裏に「嘉永五子年首秋野間村 利左之門」とある。

本書は、次の踊歌から成る。

御宮踊 御神楽踊 見物踊 八嶋踊 小順逆 御船踊 世之中踊 源

氏踊 鐘巻踊 なんば踊 装束踊 御寺踊 東踊 信濃踊 あやの踊  
神鼓踊 近江踊 住吉踊 花見踊 宝踊 同歌 帷子踊 大順逆  
これらの内、忍頂寺文庫本『伊賀地方踊歌集』所収のものと同じの歌詞  
を有するものは、

御宮踊 小順逆 源氏踊 鐘巻踊 信濃踊 綾の踊 宝踊 大順逆  
で、近似するものとしては、

鐘巻踊 装束踊

がある。同様のことは、上野市・小田・慶応三年本『雨乞踊歌』(本田安  
次著『語り物・風流二』所載)と本書においても言える。帷子踊の分  
布は広いが、伊賀地方内で比較するなら、上野市・猪田・明治十九年本  
『踊歌』(真鍋昌弘他翻刻)『伝承文学研究』・22号所載・帷子踊などと近  
いものである。

全部の踊歌について、伊賀地方のものとの対照は不可能であるが、ほ  
ぼ「野間村」を、伊賀・上野市にある野間と見ておいてよい。

本書には、最後の「大順逆」のあと、「ふりう番組」として、踊歌名を  
もう一度記したあと、「願ほどき番組」として、

御本社<sup>五</sup> 竜王<sup>五</sup> 両脇社<sup>五</sup> 天皇<sup>五</sup> 両寺<sup>五</sup> 庄屋<sup>五</sup>

のように分けて、それぞれどの踊歌を披露するかを記してある。

(II) 雨請踊り本 一冊 整理番号 1-442

慶応三年書写。二三・〇×一六・五。一三丁。外題「雨請踊り本」。外題  
右肩に「慶応三年卯七月」、左下部に「慶助所持」。

本書は、次の踊歌で構成されている。

入波 打入道引 雨請踊り かねい踊 伊勢嶋踊り 鎌倉踊り 忍び  
踊 ごもん踊 九ツをどり 丹後踊り とのみ踊

入波は、

上へ河ハきしの 目白の柳あらわれてやあはくくくへ かつらきん  
の上 岑より雨がふり来り。所も。はんじやよ。上国もゆたかなりけ  
りやあはくくく

とうたうが、ここに見える「葛城の峯」は、例えば、

葛城山のみ山から夕立ちはさんさと降り下す

葛城山の黒雲は里へさがれば夕立はさんさと降り下す下略(和泉・

岸和田・塔原、葛城踊。現地採録)

かつらきの山のたからでの 国で壱ツのりをんのこまよ たからふら

こやな あらめでたく

かつらき山のしやだんのたくみ 四方八ツむねうしろは山よ 谷をへ

だて、 かけづくりくく下略(和泉・父鬼・橋本家蔵『笹踊り音

頭』大越勝秋編『泉北地方の民謡集』(一)所載)

のごとく、特に和泉地方雨乞踊歌において頻繁にうたわれる。

かねい踊。この題名は各地に見られるが、同系の鐘巻踊は、例えば和

泉・岸和田の、

一ばんに、此かねはくくたんごの国でゐたれどもく、かねにもなら  
ずかねく、やあふもや、ゑいたたらを、いよゑい、以下囃子詞

省略

二ばんに このかねをく やまとの国にもゐたれども ならずかね

く  
三ばんに 此かねをく かわちの国にもゐたれども いたれどかね  
にもならずかねく

四ばんに 此かねをく いづみの国かいつかの ごぼうのまへでい  
たてたよ さてはごぼうはめいしよかなく (天保二年書写「神踊  
歌」・鐘い踊)

を見ることが出来る。ざんざか踊群でうたわれる「鐘鑄踊」とはまた別  
系統である。

丹後踊。清水・八幡・天王寺・住吉・西の宮など、上方やそれに近い  
名所がうたわれている。

とのみ踊。次に引用する、和泉・岸和田・掃守郷・「躍歌并太鼓ひか  
ゑ」(「和泉史料叢書・雨乞編」所収)の「殿見躍」と同種である。

殿へ参りて御門を見れば、門は白かねとびらはこがね 葺たる瓦は板  
がねよ 殿見おどりは一おどりく

殿へ参りて御庭をみれば 三尺ほうしをたすきにかけて、こがねの枡  
でよね斗る―下略―

「入波(入端)」とともに、「打入」も和泉地方踊歌ではしばしば用い  
られる用語である。

以上により、本書は、和泉地方雨乞風流踊歌本と見ておいてよからう。  
なお「入波」のはじめの部分については、風流踊歌群内では、「日本歌  
謡集成」・巻十二所載、和歌山・有田郡・雨乞踊歌・いりは、

ニヤ河岸のコハ河岸のハアねー りろのハア柳のよハアアウ吾れに実  
にやそう

が近い用例となる。また、

川ぎしんのウく めしろのウ柳よあらわれてく いかやあ君よ  
まくら定めて やや (高知・室戸市・吉良川・御田八幡・田歌)  
の他、鳥栖・四阿屋神社・御田舞歌、信濃地方・神歌などに類型が認め  
られる。

(12) 雨請踊歌 一冊 整理番号 1—443

明治二十年書写。二四・五×一七・〇。一五丁。仮綴本。扉題「雨請踊  
歌」。扉題の右に「明治貳拾年七月十四日」、左方に「釜屋郡溝端宗吉」。  
最終丁に「本〇多紀郡・釜屋むら 溝端宗吉」とある。

本書は、次の構成をとっている。

道歌 道歌切 住吉踊 すげかさ踊 肥後踊 かたひら踊 鞍馬踊  
越後踊 中入後の道歌 鎌倉踊 するが踊 松虫踊 具足踊 出雲踊

雨乞踊

この内、道歌切は歌詞の記載がない。多紀郡における雨乞風流踊歌であ  
ることがわかるので、兵庫県内の他の踊歌本において、それぞれ同類の  
踊歌がある場合、それを一つずつ指摘しておく。

道歌。三田市・上本庄・百石踊・道歌と同じ。

住吉踊。氷上郡・柏原町・新法師踊・住吉踊と同じ。

すげかさ踊。右掲百石踊・菅笠踊に近い。例えば、左記の程度である。

菅は京の中野の小菅く 夜露に打せとふまれたく 一切

糸は京のしりをかよいよ まいとで縫せと好まれたく 一切 (本書)

十七八のや十七八のや 好の笠の菅をば 何とや好まれたぞや 菅を

ば京のや 善光寺山の 中野の小菅 夜露にうたせと好まれた 菅笠

踊りを一踊り。

十七八のや十七八のや好の笠 糸をば何とや好まれたぞや 糸をば京

のや糸屋の娘 十三合せと好まれた好まれた 菅笠踊をひと踊 (百石

踊)

かたひら踊。右掲百石踊にも帷子踊は見えるが、同一の歌詞ではない。

越後踊。「淀の川瀬の水車」「今宵天満の橋に寝て」「佐渡と越後は筋向

ひ」などの、近世俗謡の組み合わせである。

鎌倉踊。多可郡・八千代・千石踊の帷子踊など。いわゆる一般的な帷

子踊。姫路・白国村・雨乞踊の鎌倉踊も同種。

松虫踊。右掲・百石踊の松虫踊が同じ。ただし本書のはその一部分。

具足踊。氷上郡・氷上町・谷村・新発意踊の具足踊などと同類。

出雲踊。加東部・上鴨川・雨乞踊歌・うわなりをどりなどと同類。

(13) 大日本神勇歌踊本 一冊 整理番号 1—479

明治初期書写。二四・五×一七・〇。二九丁。仮綴本。扉題「大日本神

勇歌踊本」。扉題の左下方に「桑野村 岩川所持」とある。

本書は、阿波・那賀郡・和食・『大日本神踊歌』(浅野建二著『日本歌

謡の発生と展開』所収)に見える踊歌と対照させておく。上が本書。

(入羽)——粉黍粉踊(入羽)。美の、踊——美濃の踊。美ころ踊

——見頃の踊。鎌倉踊——鎌倉踊。白金踊——白金踊。つば黒

踊——燕おどり。茂志こ踊——申子踊。虎松踊——虎松踊。手

ぬぐい踊——手拭踊。恋の踊——恋の踊。殿御踊——殿御踊。

綾はた踊——綾旗踊。かたひら踊——帷子踊。忍の踊——忍の踊。

白金踊——白金踊。忍ひの踊——真身踊。御寺入は——寺の入羽。

御寺踊。上成踊——歟踊後妻。しだん——した段踊。青柳源太郎

踊——源太郎踊。伊勢嶋踊——伊勢嶋踊。船子踊——舟子踊。

住吉踊——住吉踊。相模踊——さが見踊。小草の踊——小草踊。

鞍の踊——鞍踊。平野踊——平野踊。扇虎松——扇虎松。若殿

踊——若殿踊。宝の踊——宝の踊。女良屋——女郎屋踊。清月

踊——清月踊。坂東踊——坂東踊。寺の引踊——寺引踊。おた

か踊——お鷹踊。引踊——宮引踊。

以上の如く、ほぼ完全に同種の踊歌を伝えているものである。本書は、  
これら踊歌記載のあと、次の踊場を記してある。

天神様へ九番 ちんじう様五番 二ノ宮様へ五ばん 寺へ五ばん 竜

宮様へ三ばん 庄屋ニ而五はん 王子権現様へ七番 杉尾様へ五番

山神三社へ三ばん 地神水神様三ばん あたご様七ばん ぎをん様七

番 八まん様へ三はん ひたち様三ばん んんこふ様七ばん 拾式社

権現七ばん □□三ばん

本書の「しだん」の部分で、最後の三行、

へ青柳キに付てきたよな此丸を有を

へ松木に付てきたよな此丸を

へ桜木に付てきたよな此丸を

は、やはり『大日本神踊歌』にあるように、「青柳踊」を、「した段踊」に続いて独立させるのが本来であろう。「青柳踊」は、いわゆる鞠の踊であるから、本書のように「青柳」「松木」「桜木」で終るのは不完全で、「紅葉」をうたう行が脱落していると見てよい。本書の「此丸」は「此鞠」の訛である。

「桑野村」は、阿波・那賀郡・桑野である。

(14) 盆踊御どぼん 一冊 整理番号 1—495

明治一八年書写。二四・五×一六・五。二二丁。仮綴本。扉題「盆踊御どぼん」。扉題の右に「明治拾八年酉八月改メ」、左下に「古川源之助」とある。

本書の踊歌は、和泉・岸和田・明治二年書写「踊おんど本」(和泉史料叢書・雨乞編)所載と比較されるべきものであり、踊歌名及び歌詞すべてにおいてほぼ同一と見てよい。ただし、本書では冒頭の一群に題名がないが、「踊おんど本」によって、「入端」とあるべきものであることがわかる。この歌詞の中で、「踊おんど本」の三首目が虫喰いで判読しがたい部分であるが、本書の、

此おんどのおてらがよいに尺八竹をゑてきた  
を参考とすることができる。

本書の極楽踊は、

南無やさいほのごくらくゑく 無常のこどもがあつまりて さいのか  
わら

のあと、

まつはつはるの花たつるにわく 松と梅とをたてまぜて 松にあら  
しがあるときく やあこゝろゆるすな梅のはなく 下草踊をおどろ  
よう

三月くればもゝの花く したれ柳とたてまぜてやあ かぜにしたれ  
ておもしろや 一下略—

と続く。これには明らかに歌詞の混乱があるので、やはり本来は「踊お  
んど本」の、

極楽踊

南無や西ほう極楽へく むらの子供があつまりて あいの河原のも  
のがたり 極楽踊をひとおふどりしとおけよく 一下略—

地藏踊

なむや西ほのみだによらいく 一念みだをねんずれば ぐぜいのふ  
ねにさをさして しるもしらんもおしなえて 浄土のうてなにした□  
せ□とのおんちかひく 一下略—

下ぐさ踊

まつはつ松の花をつるにはく 松と梅とがたてまぜて 松あらしか  
あたとさる 心ゆるすな梅の花 下ぐさ踊をしとをふどりしとおどろ  
よく

の如き構成であろう。

みやこ踊。「踊おんど本」には歌詞が欠けているので、本書によって、その四連の歌詞を補うことができる。

果報踊。本書にのみ記載されている。前掲極楽踊などと同列のものである。

「踊おんど本」には、第一丁目裏に「明治式巳七月山口福田常右エ門」とある様子で、『和泉史料叢書』校訂者・出口神曉氏によれば、「山口」「福田」は姓名でなく地名で、「山口」は岸和田市の山滝地区、福田は南掃守地区」にある。また「この本は八木地区の中井町の元庄屋中氏の所蔵本の中の一つで、この町の式内社である夜疑神社での雨乞行事の歌本と思考される」と述べておられる。おそらく本書も同地域のものとは判定してよからう。

(15) 風里う踊本 一冊 整理番号 1—496

寛政六年書写。二四・八×一七・一。二二丁。表紙後装。扉題「風里う踊本」。最終丁表に「右風流踊之本依小子之恋望写し置候 □□有他見もの之 寛政六年寅七月日 稲塚村 持主古寺吉蔵」とある。

本書を、丹波・氷上郡・春日町・稲塚の風流神踊、つまり新発意踊（喜多慶治編『兵庫県民俗芸能誌』所載）と対照させると、ほぼ完全に一致することがわかる。本書の「稲塚村」は同地のことである。ただし本書に御寺踊が欠けている。本書の踊歌名を記しておく。

新発意口上初手之拾式 口上

道歌 願農踊 十九踊 清水踊 善悪踊 車踊 月見踊 近江踊 燕

踊 忍踊 祇園踊 鐘鐺踊（以上、ユリオドリ、カエシオドリ、ヒヨウシオドリの注記がある）

この内「善悪踊」というのは、稲塚と、同じく春日町の野村とに伝承しているもので、

ザンホロくソツくウ 向ひな川原に布ふむ女子イヨ善悪 足じろ  
手じろに眉くろに目ぼそイヨぜんあく あれこそ人のイヨ殿御ねとろ  
よノフヲ、善悪くソツソー ソレソ ランくソソ  
足手が白イとて殿とるならばイヨぜんあく 皆女郎達ハイヨとの子ね  
とりかノフヲ、ぜんあく ソツソツソレソく ー下略ー  
のようにうたわれる。「ぜんあく」又は「ぜんなく」が囃子詞として使用されているもので、『田植草紙』・53番

へかさのけしやうはせんなくかさりまゐらせう

にあわせて注意される。「田植草紙」との関係では、「髪けづりけはい化粧せよ」（十九踊）を拾うことができる。

(16) 零謡 一冊 整理番号 1—498

江戸末期書写。二六・〇×一八・〇。一〇丁。仮綴本。扉題「零謡」。本書は、はじめに「零次第踊」として、祭場・楽器・装束などの説明があつて、次に以下の踊歌が続いている。

西の時雨 沖の黒藻 笹の五郎兵衛 鶴の巢ごもり 正右衛門 扇の  
地紙 雨の踊 四季の踊 花のをどり 豊後踊 五嶋踊 新宮踊 米  
や踊 御茶場踊 出雲踊 天竺踊 忍ひの踊 尾張踊 若狭踊 御鷹

踊 恋の踊 稲踊 千松踊 六角踊 船の踊 稲葉踊 御屋形踊

右の踊歌の内、「六角踊」は、播磨・宍粟郡・チャンチャコ踊の一種、

八月踊（千種町）の「六角踊」で、「あふみの国の六角殿から」とうたうところと関連をもたせることができよう。「雨の踊」は中程に「比田の横田の若苗を しよぼりく」と植置て 又くる嫁にからしやしやふ」のように、「飛騨踊」の歌詞を用いているが、同様のものは、兵庫・加東郡・南条町・秋津住吉神社・百石踊の「雨の踊」において認められる。

「西の時雨」「沖の黒藻」「笹の五郎兵衛」「鶴の巢こもり」「正右衛門」「扇の地紙」の五種の俗謡をはじめに記しているのが、本書の特色であろうが、いまのところどの地方の踊歌本であるかを明確にすることができない。右に述べたところからして、一つの推量は、播磨地方の雨乞風流踊歌本であるかもしれない。

(17) 雨乞踊歌集 一冊 整理番号 1—499

文化十一年書写。二四・四×一八・八。二二丁。表紙後装。扉題「雨乞踊歌集」。扉題の右肩に「文化十一年」、左に「戊六月 笹踊」。最終丁裏に「天保十年 文治」、二〇丁目裏に「古山 安場村 文治」とある。

古山・安場村は、伊賀・名賀郡・古山・安場村（上野市・古山）を指す。これに最も近い踊歌本として、上野市・猪田・雨乞風流踊歌本（真鍋昌弘他翻刻。『伝承文学研究』・22号所載。同一系統の、明治九年本、明治一九年本・明治三三年本の三種）があるが、御宮踊、大順やく、大順や九、小順やく、御殿踊、草木踊、山伏踊、御にわ踊などで同種の歌

が見える。本書はこの他に、いくさおどり、子そく踊、長者踊、馬屋踊を所収している。

なお、本書においても、それぞれの踊歌のテーマとはまた別に、天じく雨ず川に水がのふて 里に立くんで雨をふらす是まで（御宮踊）

をや里に雨がふるやらくらとなる おいとまもしていざかいろ（小順やく）

おんどる若中のめしたる笠ハ ひでり笠か雨がさハ 伊せ雨笠おかいよせてく（長者踊）

などの歌詞が、雨乞の呪詞としての役割りをはたしていると理解せられてきたのであろう。

(18) 踊本企催手本 一冊 整理番号 1—881

明治初期書写。二三・五×一五・八。三〇丁。外題「踊本企催手本」。表紙裏面に「京都府山城國相楽郡大字原山久保氏用」、裏表紙に「大字原山久保喜之介用」とある。

本書は、山城・相楽郡・原山に伝承したものであることがわかる。京都府とあるから、明治にはいつてからの書写本であろう。次のような踊歌が所載されている。

桜の踊 花の踊 大しゆん役 御庭之踊 御寺踊 同踊倦文 いくさをどり 丑若をどり うぐいす踊 うしとの踊 こふかけ踊 名しよをどり 忍のび踊 若衆踊 あまこいを取り かねまきをどり 雪う

ちをどり 大神様 これより新踊り かまくらをどり

なお「大神様」は「大臣様」で、百合若大臣伝説をうたっている。ちなみに「大臣踊」には、本書以外で、次の用例がある。

阿波・那賀郡・大臣踊（「俚謡集」所載）

阿波・勝浦郡・大臣踊（同）

山城・久多・「花笠踊本」踊番附六拾壹番・船かた、大臣、ゆり若踊

（「藝能史研究」・40号41号。徳江元正氏翻刻）

山城・相楽郡・「山城国踊歌九番」・大臣踊（浅野建二著「日本歌謡の

発生と展開」所収）

丹後・舞鶴・田井氏神祭礼踊歌・鷹の踊（「舞鶴市史」所載）

伊賀・阿山郡・島ヶ原村上村・雨乞踊歌・大臣踊（「続日本歌謡集

成」・巻四所載）

これらの内、物語の大詰（昔丸が弓の競技で正体をあらわすところ）をうたうのは、本書と「山城国踊歌九番」の大臣踊と阿山郡の大臣踊である。いま三者を対照させておく。なお、大臣踊については、真鍋昌弘「風流踊歌覚書・下」（「立命館文学」・三七九・三八〇・三八一合併号）にもふれている。

## 本書

山城国踊歌九番	阿山郡・風流歌
弓がはじまつまと がなひ、さやこけま る、矢とる弓にごな んわれそうく	弓が始まる的が たち、さらば昔丸 矢お取らしよ、大 臣踊は一踊く

まといわられて矢

つちをこえて、弓の  
わるさよいよのわる  
さよ、取立弓をなげ

はりて、弓にごなん  
いわれそうく

たいじんのどの、く  
じんのときの、くろ

がね弓がてんにかゝ  
りてあるほどに、そ

れヲだしていせて見  
よ、このよな弓をい

るときわ、よういが  
のてわいらまい、弓

にごなんわいわれそ  
うく

たいちんとの、ど  
じんのときの、をど

しのよろいがあるほ  
どに、それをだして

いせて見よ、弓にご  
なんハ いわれそう

其処な物の押手

の恵さよ、其処な  
者引手の恵さよ、

ゆめにこなんとじ  
やりしやう、大臣

踊は一踊く

大臣の御陣のと  
う、緋絨鎧が御殿

に籠めてあるおと  
に、其れ取出して

著せてみしよ、大  
臣踊は一踊く

大臣殿御陣のと  
う、鉄弓が御殿に

籠めてあるほどに、  
其れ取出して射せ

てみしよ、大臣踊  
は一踊く

十三束に五人張、  
執つて揃めて追つ

番ひ、大臣踊一踊  
く

弓手の恵さ、愛な者の引手の

恵さ、弓に御難のいわれぞふ  
ヤアく

大臣踊は一踊、白銀弓のえ  
はり未張ふたよに、ふたよに

成ほどひかれぞ、弓に御難  
のいわれぞうヤアく

大臣踊は一踊、鉄弓が御殿  
に籠めて有るほどに、それと

んだして討せて見せふ、弓に  
御難のいわれぞうヤアく

大臣踊は一踊、十三束に五  
人張とよ、此よふな弓は只と

引かれぬ、鎧がのふては引か  
れぬ、弓に御難のいわれぞう

ヤアく

大臣踊は一踊く、大臣殿  
の御陣の時の、緋絨鎧が御殿

に籠るほどに、それとんだし  
て、射せて見しやふ、弓に御

難のいわれぞうヤアく

己をば誰ぞとおもやるぞう、



く  
われをたれともお  
もうわれしそ、弓わ  
が大ちゃんよく、大  
神踊ハ是迄

---

己をば誰と思ひ  
候よ、己こそ百合  
己こそ大臣百合若よ、大臣踊  
は是迄よく

(19) 阿波踊 一冊 整理番号 1—930

江戸末期書写。二四・〇×一六・三。四五丁。仮綴本。扉題「阿波踊」。

本書は、次の踊歌を所収する。

恋の踊 ひんら踊<sup>(マユ)</sup> 女郎や踊 鞠踊 ほそぬの踊 鎌倉の入は おに  
は踊 鎌倉踊 牛若踊 糸屋踊 恋の踊 お若衆踊 ともあつくし  
あい引踊 きのうち踊 せい月踊 とら松踊 黒き物踊 関東踊 し  
たれ柳入は かうらい踊 手拭踊 しうとめ踊 伊勢嶋踊入りは 船  
子入れは踊 町屋踊

右の各踊歌の内、前掲(7)の「神踊歌本」(阿波・那賀郡)所収踊歌と一致するのは次のようなものである(カッコ内は神踊歌本の方の題)。

恋の踊 (同) ひんら踊 (平野踊) 女郎や踊 (女郎屋踊) ほそぬ  
の踊 (帷子踊) 鎌倉の入は (いれは踊) おには踊 (小草踊) 糸  
屋踊 (源太郎踊) お若衆踊 (同) せい月踊 (清月踊) とら松踊  
(扇虎松踊) 手拭踊 (同) 伊勢嶋踊入りは (伊勢嶋踊) 船子入  
れは踊 (船子踊)

さらに(13)の「大日本神勇歌踊本」(阿波・那賀郡)所収歌と一致するもの

が八例ある。本書の題目も「阿波踊」である。  
本書は、阿波の風流踊歌本で、より限定するなら那賀郡伝承のもので  
はないかと思われる。

(20) 下草踊音頭本 一冊 整理番号 1—931

文化九年書写。二四・〇×一六・五。一六丁。仮綴本。扉題「下草踊音頭本」。最終丁表に「文化九年申正月吉日深尾恒松」とある。

次に本書の踊歌(上段)を示し、河内における雨乞風流踊歌の善本、すなわち、貞享二年書写「河州三之宮大明神踊歌」(A。枚方市史編纂室保管)、小崎伝一氏蔵「三之宮踊歌」(B。「津田史」所載)、寛政三年書写「拍子踊拾七番記」(C。河内・星田・西井長和氏蔵、弘化三年書写「拍子踊音歌」(D。河内・交野・久保田与十郎氏蔵。「伝承文学研究」・25号所載。真鍋昌弘翻刻)などに見える踊歌で同種のを添加し(中段)、それらにうたわれている地名等をも参考に引き出しておく(下段)。

下草踊	御田 (A、B)
御田踊	鶯 (C)
鶯踊	連雀 (A、D)
連けやく	屋形 (A、C)
屋形踊	名山おとり
名山おとり	塩くみおとり
塩くみおとり	ひようこのうらはま。明石のうら浜。

ふつきおとり

富貴 (B)

わかさの浦浜。さかいのうらはま。  
大阪のうらはま。

御寺踊

お寺 (A、C)

根来寺。粉川寺。惣達又は宗善寺。

糸よりおとり

糸寄 (A、B)

八幡の山。清水寺

花のおとり

小原。吉野。清水。北野。鞍馬。

ひむ田おとり

飛驒 (A、D)

忍びおとり

忍び (A、D)

商ひおとり

商 (A、B)

伏見の町筋。さかいの町筋。大和の  
国。

恋のおとり

恋 (A)

屋形踊打入口上

「下草踊」は、和泉地方にも確認できる。地名もほぼ上方のものである  
ことがわかる。

本書は、まず河内（北部）に伝承した踊歌の書留ではないかと推定で  
きる。

(21) 踊歌之寫附 一冊 整理番号 11-932

文久元年書写。二四・六×一七・三。一四丁。仮綴本。扉題「踊歌之寫  
附」。扉題の右に「文久元年辛酉ノ年写之」、左に「誠出小場」橘主吉印  
とある。

本書は次の踊歌を所収する。

大宮踊 日本踊 高砂踊 鞠の踊 坂本踊 近江踊 大坂踊 花見踊  
国本踊 駒引踊 神靈踊 所望踊 小順逆 大順逆

陣役踊を含む踊歌の系統であることがわかるが、これら踊歌の中で、例  
えば大坂踊・花見踊・鞠の踊・駒引踊などは、近江（甲賀地方他）の踊  
歌と同一系統であることがわかる。次に一例として大坂踊のみを引用す  
る。

大坂殿へ参りて見れば七つの隈に矢倉を上ゲテ 先ツハ見事な御山城  
東の矢倉エ上りて見れば信野境が一目に見へる先ツハ見事な御山哉

（本書）

大阪殿へ参りて見れば七ツの口に櫓を立て、

東の櫓へ上りて見れば参り下向はやり揃ふはや淀川へ舟が着く （甲

賀・油日・雨乞踊歌）

近江踊は、近江八景をうたい込んだもの。本書を甲賀地方のものとする  
こともできる。

(22) 雨乞風流踊本 一冊 整理番号 11-933

江戸末期書写。二〇・〇×一四・〇。四六丁。表紙後装。内題外題とも  
になし。ただし目次の最初に「踊目録」とある。

本書は、次の踊歌を含む。

伊勢島踊 御宮踊 参宮踊 御殿踊 信濃踊 花見踊 愛宕踊 嫩踊  
佐渡島踊 取引踊 軍踊 今川踊 榎踊 鞠蹴踊 鈴木踊 境踊 鐘

舞踊 具足踊 所望踊 加賀踊 順礼踊 鐘巻踊 小陣役 大陣役

踊歌記載のあと、拍子附として太鼓の口調子が見える。

陣役踊を加える風流踊歌群の一端である。前掲⑩の無題本「雨乞風流踊歌本」(陣役踊を含む)と対照させると、内容・題名ともに共通するものは、

御宮踊 信濃踊 小陣役 大陣役

である。「榎踊」は、甲賀・多羅尾村・太鼓踊に見え、「境踊」も甲賀・草津市・洪川・花踊の中に見える。ただし、「鈴木踊」は、ざんざか踊系に伝承する「寿々木踊」に比較的近いと言えよう。

伝承地を決定し難いが、伊賀又は甲賀地方が推定される。

⑫ 山城踊くとき 一冊 未整理

天保四年書写。二一・五×一四・三。一九丁。仮綴本。扉題「山城踊くとき」。扉題の右に「天保四巳九月吉良日」。一八丁目裏に「天保四巳九月九日」「踊拾四番」「上古沢村 伊兵衛」。一九丁目裏にも「上古沢村 伊兵衛」。なおこの本を包むボール紙カバーに「紀州踊拾四番」とある。

この「上古沢村」は、すでに「全国風流踊り歌一覽」(『民俗芸能』43・44合併号)で山路興造氏が言われたように、和歌山・伊都郡・九度山町・上古沢のことである。

所収踊歌は、

伊勢湊 御山伏 簀り踊 花見踊 鶉踊 綾踊 松虫踊 鐘巻踊 浅倉踊 坂本踊 西国踊

坂本踊。これは、

サアさかもとの サアむろやがむすめわ サアじうじがいけい サア

よめりとや サアく

サアいけもをりよ サアわが子をかやせ サアじうじがいけの サア

いけもりよ サアく (下略)

と続いてゆくもので、『日本歌謡集成』・巻十二によると、和歌山・那賀郡、及び有田郡に確認できるものであり、一方では、田植歌として、

阪本のむろやの娘じゆくが池へ嫁入り……(『紀州文化研究』・2巻3号)が伝承している。語りぐさをふまえている。

綾踊。和歌山・高野口町・嵯峨谷神踊の「綾踊」と同一である。

鶉踊。同種のつわり踊は、有田郡あるいは河内の風流踊歌の中に求めることができる。

鶉踊。

いよをうすらのめいしよわどくくよ いちにとりてわみやこへんよ  
みやこへんでわふかくさのおよ ふかくさにこそうすらあるもの  
いざさらくくらで鶉つこよを ねをきけばねわいちもつ みざさらこ  
くらでうすらつこく

とうたわれているが、同種は、例えば、河内・雁多尾畑村の「一ヶ村定り之踊歌」・うつら踊(『柏原町史』所載)に求めることができる。

(24) 踊覚帳 一冊 未整理

寛政一〇年書写。二四・五×一七・三。五丁。外題「踊覚帳」。外題の右肩に「寛政拾年」左方に「巳未ノ七月吉日」とある。なおこの本を包むボール紙カバーに「踊覚帳 大和十津川」とある。

本書は、

入はうた 御寺踊 四季踊

から成る。その伝承地を右の如く決定し難い。四季踊の一部分は、和泉・岸和田「掃守郷藤井村神踊覚書」・四季踊に類型を求めることができるので、夏と冬の二箇所を左に引用する。幸若・「八嶋」、赤木文庫本「しやうるり御せん物語」館蔵めの一部分とも関係する。上段は本書。

南をなつにも打見れハくす  
山にいけをほらしつゝ いけの中  
にハほうらいほじゆかい□しよと  
て 嶋から六りのかよいにハか  
ねのそれ橋しよかけさして 橋の  
下にはうら嶋太郎をがつりのふね  
五しき□□□つなかしければ  
いつもなつかと打見れバく 四  
季の踊ハ一踊りく

北をふゆにも打見れハくす  
みやきをきながすみをやく すみ  
がまよりけふりか立ハいつもふゆ

南は夏かとうちみえる すあたか  
池をほらしつゝ 池の中には蓬菜  
王が ゑんしゆを立て三の島をつ  
かせつゝ 島より陸路の通ひみち  
かねのからはし掛けさせて はし  
下には浦島太郎がつりのふね 五  
色のいとでつながせさせれば い  
つも夏かと打みえる

北は冬かとうちみえる 四方の  
干草も冬かれで 炭やき翁がすみ  
をやく 炭やき窯の煙が立てば

かと打見えれハく 四季の踊ハ 一をとりく  
いつも冬かと打みへる

「入はうた」の「此程のく御寺かよいに鳴しやくはちよろたサアく」以下の歌詞は、例えば(1)「神踊本」にもある如く、特に和泉地方踊歌・道歌の代表的な型である。

(25) 雨乞踊歌・同女郎踊歌 一冊 未整理

安政三年書写。二四・五×一七・〇。一一丁。外題「雨乞踊歌・同女郎踊歌」。表紙外題の右肩に「安政三」、左に「辰七月」「常助」とある。

本書は次の踊歌から成る。

いりは 恋のおとり 若衆踊 お竹踊 女郎踊いりは 阿弥子踊 豊後踊 才歌おとり

この内「阿弥子踊」は、次のようにうたわれるもので、例えば、天理図書館本「おとり」などによって代表される女歌舞伎踊歌の「やゝこ踊」の歌詞を伝えていることがわかる。

△おほろ月夜のや山のはにんくくくヒイヤく名これおしやつ  
れなや歌尻んくくく

ハラくホロくハラトイウテタガナミダゾロムラサメハアチ八十七  
シ三ノシトサラ

△是より返し サアリくヒウリヤニヒウリヤ

△返しヒヤラロウニヒヤルロく

△だいて寝た夜のア明月ハンくくくヒイヤ はなれかたなや寝

はだや歌尻先々返り

▽我おすさめてコ此君おく おもいきれとやふくつとや歌尻同断

△行進しわ小舟かよき君ますハく かじをしんしづめて△返シなの  
り合セく ひうりやにひうりや△返シひやらうに ひやるろく  
んくくく

本書のように、「急げ新発意後から時雨がしてくる」の歌詞を「いりは」  
として利用する地域には、和泉・讃岐などがある。

26 南條踊指南抄 一冊 整理番号 1—880

文化一三年書写。二三・三×一七・〇。三六丁。端作り題「南條踊指南抄」。最終丁表に「右南條躍之記合本一冊、廣瀬照應先生の秘書令借用及書写了 文化十三年丙子神無月良辰 藤原長昌謹書」とある。

南條踊の詳細を記録。入端・走り踊・由利踊・イモフミ踊・由利踊・をり踊・帰踊の進行にしたがって詳しく説明されている。現在南條踊と呼ばれるものは、広島・山県郡・新庄、山口・岩国市、長門市・湯本の三箇所伝承しているが、本書はその岩国市の南條踊に関するものである。

なお、「南條踊由来抜書」(文化二年書写)・一冊・整理番号1—968は同じく廣瀬照應の写本から書写したもので、本書とほぼ同様の書である。